

【資料】

星野鏡三郎の事跡（５）

——『月刊 體驗教育』星野鏡三郎追悼號・「回顧談」——

【資料 1.】

『月刊 體驗教育』星野鏡三郎追悼號（抜粋） 第四十八號（昭和七年十二月十五日発行）

【資料 1-①】

追悼號の發刊について

兒玉九十

當校設立者星野鏡三郎先生は七十四歳の御高齢とは申せ、平素至つて御丈夫であられましたし、十月三十日の運動會にも、御令弟村上理事が^(ママ)出場せば、來賓競争にも參加されたい御氣持さへあられた程の御元氣でしたから、今回の様な事は夢にも思はなかつた事でありました。餘りの突然の事に、只茫然といたしました。併し、かくては、先生の御精神に添ふ所以ではないと思ひ直し、せめては御追憶の一部なりと集め、御靈前に手向けたいと存じまして、大急ぎで企てましたのが此の追悼號で御座居ます。年末で取急ぎました爲に、意あつて言葉整はず、爲に或は、故人に禮を失する様な事がないとは申されませんが、左様な點は何卒不惡御諒恕を願ひます。

【資料 1-②】

星野先生の訃

星野先生の御發病は十一月十一日であります。病重しと感付かれて以來、病狀、手當等、常に微細に亘り自ら醫師に質問され、鬪病療養に力められ、醫師の先生方も感服されて居りましたが十二月六日午前一時半に至り、死期を悟られ、御家族、御兄弟、御親戚の方々に一々永訣の御挨拶を述べられ、淺羽、河原兩先生には手厚き看護を謝され、「病革る病人面會を求むる切なり」との急報にて駈付けたる兒玉校長に學校の後事を依頼せられ、「これで思ひ残す事はありません。樂に行けます」を最後の御言葉として何の苦痛もなく、樂々と永き眠に付されました。臨終に際しても一言の家事に關する事なく、リットン報告書問題は如何になりしかといふ質問迄せらるゝ程最後迄國家を念頭に置かれました。又人事を盡して後、天命を知るや生に對する何の執着もなく一々叮嚀なる別をされるなど、實に終始を一貫された立派な御最後でした。

御永眠と共に校長は是非校葬に致し度き旨申出でましたが、御遺族は故人の御遺志により固く辭退せられました。

校長は六日晚歸校、七日早朝臨時職員會を召集、又、生徒全體に向つて訃を傳へ、哀悼の辭を述べ、「校葬は辭退されたにしても、校葬の心組にて眞心をこめて御弔ひ申さねばならぬ」と訓話し、八日本邸御歸着時全員御迎へ、九日葬式當日の表弔休業及び全員參列等學校としての手配を決定、夫々準備を命じ、夕刻、伊東別荘に向ひました。

伊東の別荘に於ては七日夕刻増上寺様御名代御出でになり懇なる納棺式が行はれ、前夜に引續き近親、伊東町長及び有志の御通夜がありました。八日朝、伊東町長始め有志の拜禮があり、八時棺を靈柩自動車にお移し申し、僧侶御一名、令息正一氏、徳久社長、兒玉校長に護られて午後三時初臺本邸に御安着、親戚、知人の方々、本校職員生徒の出迎を受け、棺は生徒十名に依り、邸内祭場に安置されました。教へ子により移される時など一同一層感慨に打たれ涙一入新なるを覺えました。

夜は親戚知人、會社の方々、學校の職員及び生徒總代のお通夜がありました。

九日午後正二時より三時迄、邸内祭場(生前最も御好きな室の一なる洋風食堂)に於て増上寸貫主道重大僧正御導師にて極めて嚴肅なる葬式が靜に、規律正しく取行はれ、同夜茶毘に付し、十二日初七日當日多磨墓地に埋葬致されました。

【資料1—③】

星野先生略歴及事績の概略

- 一、安政六年十二月六日姫路藩士星野乾八三男として酒井家邸内にて誕生。
- 一、慶應元年より明治の初迄藩邸學問所に於て修學。
- 一、明治四年より鹿島岩吉氏同岩藏氏の薫陶を受け、鹿島組組織と共に其の組員となる。
- 一、明治二十九年鹿島組を辭する迄、鹿島組の係、係長、課長、營業部長として官私諸種の鐵道敷設工事を擔當成功せしむ。
- 一、明治二十七年、日清戰役の際、政府の特命にて仁川京城間の軍事鐵道の敷設を擔當し皇軍進撃に便す。
- 一、明治二十九年、星野商店を設立す。
- 一、明治三十七年、日露戰役の際政府の特命に依り朝鮮京釜線、黄澗隧道、扶桑隧道、第二漢口鐵橋工事を擔當し、病を冒して晝夜指揮を取り、豫定より一ヶ月も早く工事を完成し皇軍輸送に多大なる便利をなす。
- 一、明治四十年鐵道工業合資會社を設立す。
- 一、大正三年東京府貴族院多額納稅議員互選會に參會す。
- 一、大正八年星野合資會社を設立す。
- 一、大正八年公益の爲め私財寄附の廉に依り紺綬褒章を下賜せらる。
- 一、大正八年本邦鐵道五十年祭に當り我が鐵道工業發達に盡したる廉を以て鐵道大臣より表旌さる。
- 一、大正十二年明星實務學校を設立す。
- 一、昭和二年財團法人明星中學校を設立す。
- 一、恤兵、教育、救濟、社寺、地方費等を始めとして諸種の公益事業に寄附をなす事、數十件。
- 一、各種の公益事業に盡したる廉にて紺綬褒章の外に銀盃三個、木盃五組、木盃十六個を下賜せらる。

【資料1—④】

星野先生を憶ふ

岩河 信義

○
「何事も思ひを残す事なし」と 大安心の 臨終を聞く
(御臨終の模様をきいて)

○
天城山悠々と落ちし陽の如く 偉人の光今ぞ輝く

○
生れ來て與へられたる行を 滞りなく果し給ひき

○
いつ見てもにこやかにまし、先生の 同じやうなる御心尊し

○
まれまれにお目にかゝりしのみなれど たゞおのづから頭下りき

○
いたいけに初孫はたゞ笑み給ふ 姿を見ればいとゞ痛はし
(御葬式の日)

○
武藏の林よ守れさわがすな 教への君の奥津城どころを
(二七日忌に墓參して)

【資料1-⑤】

編輯後記

▽星野先生の御病氣を私の知つたのが本月一日で御見舞から歸つて間もなく急變、生徒に御病氣を知らせる間もなかつたので一同の驚愕悲痛は一と通りでは御座居ませんでした。

▽一般からもお悔やみを頂戴恐れ入りました厚く御禮申し上げます。設立者の他界で學校經濟の事をお尋ね下さつた方が二三御座居ましたが當校は設立當時必要なる費用一切と基本金とを故設立者が同時に御寄附下さつて財團法人になつて居りますから學校には別條御座居ません故何卒御安心下さる様願度念の爲め申添へて置きます。(兒玉)

【資料1-⑥】

父星野鏡三郎儀十一月下旬伊豆伊東の別宅に於て發病(肝臟硬變症)專心療養在罷候處藥石効無く十二月六日午前十時五十二分七十四歳を一期とし永眠仕り候本人の遺志に基き近親者相集り九日東京の本宅に於て増上寺貫主道重大僧正臺下御導師の下に葬儀を取行ひ茶毘に付し十二日増上寺に於て初七日法要相營み多磨墓地に埋葬仕り候辱知各位へ早速御通知申上ぐべきの處平素『自分の死去の際は通知狀新聞廣告等凡て之を廢し近親者のみ相集り靜肅質素に葬式を行ひ埋骨等一切完了の上生前辱知の各位に厚く御高誼^(ママ)を謝し死去の御報告を申上げ決して御迷惑を相掛くる勿れ』と固く申し居り候につき實踐躬行を以て一生を貫きし故人の意思に隨ひ茲謹んで生前の御厚情を拜謝し併せて右謹告仕候

昭和七年十二月十五日

東京市澁谷區□□町□□□

男 星野正一

【資料1-⑦】

本校設立^(ママ)者星野鏡三郎先生御葬儀は校葬に致すべきの處御遺志に基き固く御辭退御宅に於て御葬儀等一切御完了致され候につき此の段關係關位^(ママ)へ謹告仕り候

昭和七年十二月十五日

東京市外 府中町
財團法人 ^{メイセイ} 明星中學校

【資料2.】

回顧談

^(ママ)
(昭利四年三月九日明星實務學校第四回卒業式に於ける故星野鏡三郎先生訓話)

卒業の皆さん、今日は、此の卒業式を以て目出度く御卒業をせられ、各々、定めて御満足のこと、私は誠心誠意御喜びを申し上げます。

只今校長から御話がありました、私は一體商人から今日迄になりました者で御座りまして、教育と言ふことに就きましては極めて不調法者で、何等申上げる程のものを持つて居らぬ者でござります。毎度此の

高い所に上りまして皆様に御目にかゝり御話を申し上げますと言ふことは、一言申せば資格は無いのでありますが、本校を設立致しました爲に斯様な高い所に押上げられまして、自分の力にもないことを申し上げなければならぬので、實は恐縮致して居る次第であります。殊に只今校長から私の今日迄歩いて参りました道を皆様にお話申上げるやうにといふお話でしたが、長い間のことで何から申上げてよいやら迷つて居るやうな始末でござります。今日御卒業の方々は何れも御卒業と同時に實社會に出られまして、實業に御従事遊ばされること、私は信じて居ります。そこで私が實業家の末席を穢して参りました關係上、その方の事を述べようかと申したら校長がそれを話せと申しますから、簡単に申します。私も七十歳のお祝を昨年致しまして、本年は七十一歳になります。幼年の折から苦しみまして此處まで歩いて参りました年を數へますと六十三年、六十三年間苦しんで参りました。此の事を只今校長が是非話せと申すのでありますが、何分六十三年以前のことから今日迄のことです。殆んど忘れて居ります。記憶致して居りませぬが、所々極く簡単にお話を致します。之が皆様の爲になるかならぬかは別問題と致して、幸に何時も御記憶下さるならば、私にとりまして此の上もない満足であります。

私は、酒井雅樂頭——只今は伯爵で小石川に住んで居ります——此の伯爵の住んで居ります所に生まれました。そして其處で育ちました。七歳になりまして、昔は學校ではありませぬ。殿様にござります學問所と申して居ります。その學問所へ七歳で上りました。そして初に大學といふ本をやりました。私はその大學を上げまして、論語を終へる時代であつたと記憶致して居ります。維新になりまして八歳にして此の屋敷を出なければならぬことになりました。それから両親に連れられまして——只今鎧橋といふ橋があります。その橋の所に中屋敷といふのがござります——一度其處に落付きました。それで此處に居りましたのは暫時でござります。愈々その屋敷から浪人を致さなければならなくなり、録といふものは少しもなく、有る物を持つて何れに行くといふ所もなく、立ちましたのであります。その時に私は父に別れました。母に連れられまして千住の奥の方に一時退きました。それから斯うして轉々として各所を歩きましたが、最後には左様な次第でござりますから、有る物を喰うて——昔武士をいふものは算盤を知らなかつた、商賣を一向知らぬ、有るものを賣つて、着物ならば一枚宛脱いでそれを賣りつゝ、流浪して歩いたと言ふやうなことでござります——遂々非常な貧乏を致しました。藩論が二派に別れ父は國事に奔走してゐる關係上、私は母に連れられて此の維新の頃は各所を潜伏して歩きました。それが爲に母は非常な苦しみをして三人の子供を育てたのであります。私は兄弟五人で兄二人はよそに預けられて居りまして、母の手許で三人育てられました。愈々喰ふに困るといふやうなことにまでなりまして、非常な貧乏をしました。その時に母も内職をし、私も小さいのを背中に背負ひまして、その内職の手傳ひをしました。何の内職を致しましたかと言ふと凧繩と申して、皆さんの上げる凧の繩を繕ひまして生活を續けたのであります。それから父の友人の許に奉公をして居りました下女の方に、暫く私一人預けられました。それからその家から極く深い縁故の所に又私は預けられました。それは今日鹿島組を經營して居られる鹿島氏です。その預かつて呉れましたのは私の十二歳の時でした。(その中に父の嫌疑も晴れまして父は無事に宅に戻りました。そこで私共天下晴れて表を歩くことが出来るやうになりました。)私は十二歳から預けられまして、それが爲に遂々丁稚小僧になりました。丁稚小僧といふことは御聞きであるか知れませぬが、その當時學校は無し、修業の爲には丁稚小僧になる外ありませんでした。十二歳から薪木も割りました。風呂も焚きました。車の後押しも致しました。丁稚小僧として凡ゆる苦しみを致しました。殆んど言葉に言ひ盡せませぬ位の苦しみを致しました。それが十二歳の時です。只今の七十一歳から之を差引きますと五十九年前です。その家に奉公を致しまして、二十九年其處に勤續を致しました。十二歳から奉公を致しまして、言葉に申上げることの出来ない程の苦しみを致しましたのであります。十六歳の時に主人から見立てられまして、倉番といふことを命ぜられました。その倉に何が入つてゐるかといふと、米もあり、味噌もあり、金物もあり、色々のものが入つてゐる倉です。その倉の番人を言ひつかりました。でその出し入れは、番人でありまして勿論やります。これを二年やりました。十八歳までこれを無事に仕上げました、私みたやうな者でも能く正直に無事にその仕事を能く守つてする、といふことを認めてくれました。十八歳から地方にその商賣で出張しました。その出張所の會計を命ぜられました。これ

は十八歳から十九、二十迄二箇年間會計をして居りました。會計といふと大層立派なやうでございますが、その時分會計で私の扱ひました金銭は漸く千二三百圓、只今の金高にしたら、約一萬圓に近いものであります。勿論大金は本店で扱ふのであります。此の會計を私が矢張り二年間致しました。で二十一歳には本店に(ママ)居りました。それから二十二歳から又出張を命ぜられました。茲に一寸前後致しますが、倉番の時はまだ丁稚小僧で盆と暮に仕着と言つて着物を貰つて居りました。その着物は夏は元より一重物であります。冬は襦袢一枚に綿入一枚、股引一本、足袋はくれません。鼠の尻尾のやうな帯を貰ひました。その頃はその襦袢と綿入だけで一向寒くなかつた。それを品物でくれたのです。今考へると少しも寒くなかつた。あの當時はこれで能く働きました。十八歳に出張先の會計を命ぜられました時、私の月給が四圓、今日はその辭令を持つて來ようと思ひましたが、もう古いことで殊に地震の時に何れかに仕舞ひなくしましたか、遂に見當りませんでした。四圓でした。それから二十になりまして、二十五錢月給が上りました。四圓二十五錢。今お聞きになつたら定めて嘘のやうにお考へになりませうけれども、さういふ時代である。それから二十二歳に又出張を命ぜられました。その時に一躍致しまして、十二圓の月給に上りました。それから十三圓上りまして、二十五圓といふ月給を四年目で貰ひました。さういふやうに幸ひ累進して参りまして、最後が百二十圓といふやうなことになる、非常な苦しみを以ちまして先づどうやらかうやら信用を得まして其處迄参りました。その時は明治二十九年で私の三十八歳の時です。その頃にはもう大分知合ひの方が出來て参りまして、その中には役人もありました。その役人中の勅任官の方でしたが、此の先生方からもう君も二十有餘年此處に勤續してゐる。大分商賣のことも覺えられたやうに思ふ。だから信用もある。獨立したらどうだと言はれた。一人の休職の方は獨立したらどうだ、獨立すると言つても資本が要らう。自分も金は無いけれども公債が三萬圓程ある。若し入用なら君に貸してやらう。もう一人の人は現職の人で勅任官、此の人が矢張り同じやうに私に商賣を奨めてくれたのです。大した助けは出來ぬがやつたらどうかといふやうな兩君の奨めに依つて、初めて明治二十九年に獨立しました。此の獨立をする迄に、大分話が飛びましたが、六十何年も経つた事ですから一寸記憶がござぬませぬ。之を詳しく申上げるといふと、何歳の時に何程の月給を貰つてどういふ役目をした、どういふ肩書きを貰つた、といふことを申上げ度いのですが一寸記憶致しませぬ。以上は獨立する迄のことを一通り申上げたのですが、これから明治二十九年に獨立をしまして自分が感じましたことを一言申上げ度いと思ひます。

人様から見出されたのでござぬますから、自分も年も若く、商賣は充分にもう卒業しまして、博士にでもなつた位の考へで居つた。そこに丁度お奨めの方がありました爲に、喜んじて獨立したわけでありまして。扱て獨立して見ますといふと、一箇月に幾らといふ月給を貰つて居つた當時の働きで獨立致しましたのですから、苦しみも一通りではありませんでした。まあ分り易いことを一言申上げますれば、一月幾らといふ月給を貰つて居りました時は、商賣が損がいつでも月給は貰へる。儲かつた際は、自分の働きが宜ければ賞興金(ママ)もくれる。實に氣樂なものです。自分が獨立をして行きましたところが、米一粒くれ手もない。自分は扱て措いて其の時分に三十二三人も人を使ひましたが、その方々に月給を與へることも出來ないといふやうな大責任を起しました時もありました。斯うなると責任の重いものであるといふことをつくづく感じました。此の獨立最初の三年間は非常に苦しみました。三年間経ちましたら段々樂になりましたが、月給を貰つて居る當時獨立を致しまして多くの手代を使ひますやうな身分になりまして、月給を貰ふ時と大變な違ひだと思ひました。月給を貰つてゐるやうな頭でしたならば、到底多くの手代を使ふことが出來まぬ(ママ)。出來ませぬばかりか、商賣も出來ません。月給を貰つて居りました時代に片腕位で出來ると思つてゐた事が、獨立しましたら兩腕どころか兩方の肩に、とても脊負ひ切れない程の重い荷を脊(ママ)はなければならぬ、といふやうな責任を感じました。自分が中心になり責任者になることは、經驗の無い方には想像も付きませんことです。併し全責任を負ふて苦しむ處に獨立の面白味、妙味があるのです。これは皆様が月給取りから獨立するといふことになります時の御参考に申上げます。

それから獨立しましてからの苦しみといふものは容易なことではなかつたのですが、これからは私などは先づ良好にして順調に今日まで参りました。斯様に申上げますと、何か私が成功でも致して居るやうに御聽

取り下さいましてはいけません。決して成功しては居りませぬ。唯今日は年を取りまして衣食住に不自由が無いといふに過ぎないのであります。どうぞ左様に御承知願ひます。

よく或る人は商人は金さへあれば何でも出来る、俺は金が無いから商賣が出来ない。さういふ妙なことを言うて私の所に参りますが、それは大變間違つて居ります。私は今日衣食住に不自由のないやうになつたが、私は親の腹から金を持つて生れたのではありません。世に出て私は前申上げたやうな非常な苦しみをして來ました。武士が滅びて風繩を縊つて母を助けて参りました。誠に情ない浪人になりまして、貧乏をして金は少しもありませんでした。併し人は信用が根本であります。私が獨立をしたのは金があつて獨立したのではなく、人から信用を受けて獨立したことを御承知願ひます。金よりも信用が元であります。それから自分の商賣といふことを眞劍に充分に覺えなければなりません。斯うして初めて人様が認めて、金儲の途を奨めて下さるのです。斯ういふやうなことで、私は三十八歳の時に初めて獨立をしたのであります。そして初めは三十二三人位の人を使ふ程度でしたが、後には相當に大きな商賣も致しました。然し根本は信用であつたと思ひます。一文無しの私の如き人間に金を貸して商賣の途を助けてやるといふ方のあることは、これはどういふところからさういふ幸福を與へられたものであらうか、是は皆様が能くお考へ下さるならば、お分りにならうと思ひます。黄金よりも先づ以て信用であります。

さういふやうに見出して貰へるやうに私は働いた積りではなかつたが、私は此の商賣に眞妙^(ママ)に何も見出されやうなどといふ考へはなく、只々無暗に働いた。無暗と努力をして参りました。さうすると資本といふものが無くても、信用といふものが出來ます。同時にその商賣といふことに就いては充分な研究が出來て居りますれば、確かに人様が見出し獨立させてくれるものと信じて居ります。人間は眞面目に眞劍に仕事に努力をしますれば、自然と人に信用されます。金はいくらあつてもその金を善用する能力が無かつたならば、是は木石に等しい、いや却つて害毒を残し、已^(ママ)に不幸を残すことになると思ひます。先づ人間といふものは一番先に眞面目に能く働いて、商賣に興味を持つて能く商賣の途を覺える。これが私は自分の商賣に安全を得べき一番の策であると思ひます。

それからもう一つ申上げ度いことは、人間は銘々頭があり、耳もあり、眼もあり、心も勿論あり、足元がある。之等が個々にばらばらに働いてはいけない。見た事聞いた事は皆分り、精神、足元、此等が一つに揃つて働くやうにならぬと私はいかぬと思ふ。耳は耳、頭は頭、眼は眼、足の先は足の先と言ふやうでは何にもならぬ。先づ根本の精神といふことに就いては、本校の最も重んずるところで常々皆さんが十分に教へられてゐることである。此の精神を以て眼と耳と頭と足元を引締め注意したら宜しい。之が一つでも缺けたら自分の思ふ所の位置に達することは出来ぬと思ふ。例へば田舎の畔道を歩きましても此の五つに注意して歩いたならば、水田の中に足を踏外さない。如何なる銀座のやうな大きな町でも、之等に油断があれば自動車に轢かれ、電車で蹴飛ばされるといふことになる。之によく注意されるといふことは、私は最も必要なこと、信じます。之は皆自分がやつて來ました上から自分の經驗に考へまして、之を申上げるので、これは私の學問ではない。私は前に述べた如き非常な苦しみをして今日に到りましたが、今考へると心を中心として頭、眼、耳、足元を引締めることに油断しないで、眞劍になつてその途を取つて來ました。私は幕末御維新の頃であつた爲に、皆さんの如く順序立つた教育が受けられませんでした。それを考へると皆さんはお幸いです。父兄の方々が非常な熱心を以て皆さんを立派な方々にならしめ度いといふ御兩親の深き思召で、小學校から確かりと順序正しく進めて中等教育をお受けになりました。此の長い間受けた教育を如何にして校長の言はれたやうに活用するか、之を活用するには私の今申した五つのものを注意する、さうしなければ活用が出来ないといふことを申上げたのです。私には前申した如く、皆さんのやうに少しも順序正しき教育はございませぬ。自分の姓名位は書きますが、あなた方のやうに立派な教育は——順序を立てた教育は受けませぬ。七歳にして學問所に上つて大學を上げて論語を上げた位で、これからといふ時に維新亂離に遭遇しまして、學校と申すものもなく、正しき教育は受けられませんでした。皆様のやうな順序を立てた學問を修められた方から見ると、私の如きは無教育であると申して宜しい程度の者で御座ります。それでは私は不勉強かと申すと、決してさうではありませぬ。いくら學問し度くても出来なかつたのです。風繩を縊らなければならぬ

らぬといふやうな境遇と、もう一つには其の時分學校はござりませんでした。それが爲に自然さういふやうな譯になつたのであります。是は皆さん、どうぞ御承知を願ひ度い。不勉強ではなかつたのですが、どうしても勉強することが出来なかつたのです。併し一生懸命努力した結果、兎も角も風繩を縋りつゝ、武士のあぶれが親の厄介にもならず、兄弟の厄介にもならず、他人の厄介になりまして獨力獨行で勉強をして此處まで來ました。さう致しますれば、私が決して不勉強でなかつたといふことは、皆様も見届けて下さると自分で信じます。斯様な譯で御座りまして、まだ申し上げれば澤山ござりますが、忘れしたので又思ひ出して申し上げることが出来るかも知れませぬ。此の邊で今日の卒業の御祝辭に代へ度いと私は考へます。

私は本年七十一歳です。皆さんの立派になれるのを見て、私は喜んで此の世を終り度いと思ひます。私は今七十一歳でござりますから、此の上十七年生きますれば八十八歳、之は望まらべきことかどうかと考へて居りますが、私が八十八歳になりますと諸君が三十五歳になると思ひます。必ず立派な人々になれると思ひます。即ち四十にして立つべき人は三十五六でも立派な方々になるわけでありまして。之は昔の言葉ではありますが、昔は三十歳でも立派な人になつて居なければならぬと考へたのであります。今日の教育から言ひますと三十に達しなくとも二十七八でも一人前、立派になつてよささうに思ひます。併しながら今日の時代は實に日一日に皆さんが開拓して行かれるには、非常に困難な時代に差懸つてゐる。これからは尙一層困難にならうといふことは誰も想像してゐる。何となれば、來年は景氣がよくなるだらう、去來年は景氣が好くなるだらうで、皆だらうである。皆根據がない。全く景氣の好くなるべき材料が一つもござりませぬ。之は私も商人でありますから、景氣に就いて見て居りますが景氣恢復の理由は何一つ發見出来ません。皆さんがこれから進路を開拓して行かれるに就いては實に御同情申し上げます。餘程御奮闘なさらんと、餘程しつかりしておやりにならぬと、皆様が目的の位置に達するといふことは餘程困難なことであらうと私は信じて居ります。どうぞしつかりと前に申した五つを揃へて進んで下さい。私は八十八迄生きて、皆様の立派になつたお顔を拜見し度いと思ひます。

それから遠方にお出で遊ばず方^(ママ)は別問題ですが、若し御在京であれば極めて茅屋な粗末な家に私は住んで居りますが、粗茶位は呈することが出来ますから、どうか序でもありまして御通行の砌り御立寄りを願ひ度い、尙立派になられたならば、貴様が俺が卒業する時に斯ういふことを言うてくれた、世に出て見たらば全部お前の言つた通りではないが、お前の話が俺の頭に感じたことがある。今日はお前を喜ばせる爲にお前を尋ねてやるんだ、といふやうな風にお訪ねを戴くことを今から期待して居ります。

（談話速記、文責在記者）